

FFPE ブロックを利用した薄切依頼内容の推移とその対応

◎小林 晴美¹⁾、原 稔晶¹⁾、佐藤 浩司¹⁾、加藤 克幸¹⁾、安藤 善孝¹⁾
国立大学法人 名古屋大学医学部附属病院¹⁾

【はじめに】

病理組織検査で作製した FFPE ブロックは、病理診断後、多岐に渡って利用されている。当院においても、二次利用の薄切依頼件数は年々増加し薄切の依頼内容もより複雑化している。今回 2014 年から 2018 年における薄切の依頼内容の推移と複雑化する依頼内容に対応するために当院で行った取り組みについて報告する。

【対象】

2014 年 1 月から 2018 年 12 月の 5 年間、薄切依頼を調査対象とし、当院で運用に使用している標本作製依頼書を元に 26 に細分類し評価した。(治験匿名化有無、EGFR、ALK、PD-L1、RAS、MSI、コンサルテーション、他院紹介など)

【結果】

薄切の依頼件数は 2014 年 585 件、2015 年 724 件、2016 年 957 件、2017 年 1067 件、2018 年 968 件と増加傾向を示したものの昨年はやや減少した。肺癌分野からの薄切依頼内容は、2017 年にかけて EGFR と ALK は増加し、PD-L1、ROS1 は 2017 年から依頼が増え、PD-L1 は 2018 年 6 月から院内検査へ移行した。肺癌分野からの依頼内容は、肺癌治療薬承認のタイミングにより依頼される薄切内容に変動が見られた。治験センターからの薄切依頼は、2016 年から増加し現在は横ばいである。治験センターからの依頼は、匿名化有無、薄切の厚さや薄切枚数も多彩であり注意力を要する内容となっていた。この複雑な内容に対しシステムで対応できないかと考え 2018 年 3 月病理システムの改修を行った。

【治験対応】

システム改修以前の運用は、匿名化ありの場合、病理システムを介さず標本作製依頼書に記載されている内容とブロックを合わせスライドガラスに何も記載せず運用していた。1 日に複数依頼がある場合、患者誤認が発生する可能性があった。このリスクを回避する為、フロスト右隅に①受付番号の下 3 桁②薄切の厚さ③ブロック番号を印字する治験モードを作製し、病理システムを介した運用へ変更した。印字した情報は 7 ミリ*2 ミリと印字面積はかなり小さく簡単に削る事が可能である。この運用開始後、治験目的の薄切依頼はほぼ匿名化ありに移行し、システム対応が可能となった。

【まとめ】

安全正確かつ臨床のニーズに対応する為に、薄切技術の向上及びシステムを介した運用は必須であると考え。また、臨床から依頼された内容を分析することで臨床の動きや我々病理診断部門に何を求めているかの把握ができ、遺伝子部門と情報共有することでよりの確な検査を提供できると考える。

連絡先：名古屋大学医学部附属病院 病理部

052-744-2582 (直通)